

【寄稿】

特集：言語教育学としてのライフストーリー研究

日本語教育を实践する私がライフストーリーを
研究することの意味

元私費留学生のライフストーリーから

佐藤 正則*

概要

本稿ではライフストーリー・インタビューの対話性に注目し、語り手としての元留学生の語りと、聴き手としての私の変容を記述する。初めに日本語教師としての私がライフストーリー研究を始めた経緯を記述する。事例として、元留学生仁子さん(本人希望の仮名)のインタビューを読み解き、彼女のストーリーを可視化すると同時に私の構えの変化を明らかにする。最後にここまでの記述を踏まえ、日本語教育を实践する私がライフストーリーを研究することの意味を考察する。

キーワード

対話性、自己言及、アイデンティティ・ワーク、構え、応答責任

1. 日本語教育実践とライフストーリー研究

本稿は筆者(以下「私」と表記)のインタビュー実践の記述を通し、日本語教師である私が学習者のライフストーリーを研究することの意味を考察するものである。

ライフストーリーとは「個人が生活史上で体験した出来事やその経験についての語り」(桜井, 2005, p. 12)である。もちろん人は人生の経験のすべてを語れるわけではない。語り手は、聴き手の問いをきっかけに、聴き手と語り手の「いま・ここ」での関係性の中で、自分にとって意味ある出来事を選択しストーリーを構築する。したがってライフストーリーの語りは聴き手に対する語り手の「アイデンティティ・ワーク¹」(小林, 2005)であり、そこでは「物語としての自己」(やまだ, 2000, p. 27)が語りを通して構築されるのである。

桜井(2002)は長年にわたるライフストーリー・インタビューの経験から「対話的構築主義アプローチ」の立場をとる。それは「語り」を「語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるもの」とし、「何を語ったのか」という「語りの内容」だけではなく「いかに語ったのか」という「語りの様式にも注意を払うアプローチ」である。「インタビュアーと語り手の言語的相互行為によってライフストーリーが語られ、そのストーリーを通して自己や現実が構築される」(桜井, 2002, p. 61)。そのため対話構築主義的アプローチにおいてはインタビューの場にいる聴き手と語り手双方が記述の対象になる。

石川(2012)は「対話的構築主義」に吟味を加え、その「対話的」の部分に注目する。そして「調査者と調査協力者がともに『主体』である」(p. 6)ことを掘り下げることによって「対話的」の意味が明らかにできると述べる。伝統的な社会調査では調査者の「主体性」は捨象されてきたと述べた後で以下のように書く。

だが、それら(調査者の主体性)を一切持ち込まず調査に臨むのは現実的に不可能である。調査協力者からの思いがけない一言や

* 早稲田大学日本語教育研究センター (Eメール: m.sato@aoni.waseda.jp)

1 「ライフストーリーを語ることは、私とはなにものであるかを語ることであり、私を表明するアイデンティティ・ワークであることだ」(小林, 2005, p.213)

態度によって調査者は自らの構えに気づかされ、ときに愕然とさせられる。言うなれば、調査協力者の「主体」性に挑戦されることが、調査者の「主体」性に対する自覚を促すのだ。それは調査協力者の現実をより鋭く感受することを可能にするような新たな構えの形成に結びつく。そして、調査者の認識の深まりは調査協力者の語りを促し、それがさらなる認識の深化につながっていくだろう。(石川, 2012, p. 6)

主体と主体が向かい合うことによって新たな「構え²」が形成され、その「構え」が語り手の語りを促し、両者の認識を深めていく。この対話性を調査者の経験からも描くことが自己言及的記述である。このような自己言及的記述は第一に「調査協力者の経験の理解可能性を高め」、第二に新たな「知」の産出に結びつく。「調査者が自らの構えを捉え返していく過程は、調査者と調査協力者がともに生きている社会を明らかにしつつ問直す過程でもあり、それは新たなストーリーの生成を帰結する」のである。このように対話性への注目、インタビューの場における文字通りの「いま・ここ」だけではないライフストーリー研究の全過程への省察につながっていくだろう(以上石川, 2012, pp. 7-9)。

以上の議論を日本語教育の文脈で考えてみる。日本語教育におけるライフストーリー研究の調査者は多くが日本語教育の実践者である。つまりライフストーリーの語り手が教師、学習者の違いはあっても、共通しているのは聴き手と語り手が言語教育の当事者同士であるということだ。だからこそ日本語教育におけるライフストーリー研究では、インタビューを語り手(主体)と聴き手(主体)の対話として捉えた自己言及的記述が一層不可欠である。三代(2013)が述べるように「日本語教育研究者であり、日本語教師である調査者の経験や構えの自己言及」(p. 86)が日本語教育学としてのライフストーリー研究へとつながるのである。

では聴き手としての日本語教師の「構え」とは

何か。それは日常の实践に埋め込まれた教育観や学習者観によって顕在化してくるものだと私は考える。だからこそ聴き手としての日本語教師の「構え」がなぜ生成したのか、「構え」がどのように変わったのかを記述することは、その日本語教師の教育観や学習者観の変容の記述にも重なっていく。そしてこのような自己言及的記述を含めたライフストーリー研究は、日本語教育実践のあり方をよりよくしていくための新たな共同の「知」を生み出す可能性がある。

以上を踏まえ本稿では、まず、私が日本語教育に携わっていた日本語学校の留学生にライフストーリーを聴ききっかけとなった一つの経験を記述する。次に、私が元留学生のライフストーリーを聴くようになっていった経緯を、事例を通して述べる。そして元留学生仁子さんのライフストーリーと、仁子さんの語りを聴く過程で生じた私の構えの変容、その変容によって構築された新たな語りを明らかにする。最後に日本語教育を实践する私がライフストーリーを聴くことの意味を、語り手に対する日本語教師である私の応答責任という観点から論じる。

2. 元留学生のライフストーリーを聴くようになるまで

2. 1. ある留学生の「声」

初めになぜ私が留学生や元留学生のライフストーリーを聴くようになったのかを記述する。私は2000年代の初頭から日本語学校で日本語教育に携わるようになった³。私が担当したのは、大学や専門学校に進学を希望する私費留学生に対する日本語教育や進路指導だった。今では「留学生」と呼ばれる日本語学校の学生も、2010年までは在留資格の名称から「就学生」と呼ばれ、身分保障の面でも留学生に対し低い立場に置かれていた。2000年代初頭は日本語学校の学生には奨学金等の公的支援がほとんどなく、多くの留学生が学費や生活費を捻出するために過度なアルバイトをする必要があった。日本語学校とアルバイト先と住まいの生活が日本語学校で学ぶ多くの留学生の現実だった。

折しも、2000年頃から中国から多くの私費留

2 桜井(2012)は「構え」を「インタビューのあらかじめ持っている調査や研究の枠組み」(p.119)とする。

3 2012年度から現職。

学生が高等学校卒業後、日本の大学、専門学校進学を目指して日本語学校に入学するようになっていた。だが明確な進学動機を持って入学してくる学生は少数だった。なぜ日本の大学に進学するかという動機も、大学についての情報もほとんど持っていない学生が多かった。とにかく経済学を勉強したい、とにかく「有名な」大学に入りたいという学生が多かったのである。日本語学校はそのような留学生のモデル・ストーリーを疑い、留学生にとって進路決定、ひいては自分の人生を考える大切な場でなければならぬはずだ。しかし当時の進路指導関係者には、留学生の人生を共に考えていこうという理念も余裕もなかった。

一人の学生の「声」について書きたい。その学生は志望大学に合格できず、第2第3志望の大学や専門学校にも落ちてしまった。以前から彼はアルバイト中心の生活をしており、日本語学校も欠席しがちになっていた。このままでは日本語学校を修了できないばかりか、修了後ビザの期限が切れても日本に留まり続ける不法滞在者⁴になる可能性があった。帰国させるしかなかった。彼を説得するため、私は何度も彼のアパートに赴いた。私は彼に不法滞在でびくびくして日本で過ごすよりは一度中国に戻って改めて日本に来るべきだと説得した。説得に応じた彼は帰国することになった。帰国直前、思い出作りのため彼の希望で横浜に遊びに行き、観覧車に乗った。観覧車の窓から下の風景を見降ろしたときのことである。「もう少し日本にいたかったな」とぼつんと呟いた。その「声」を聞いたとき、私の中でいったい彼に何をしてきたのだろうか、という思いが込み上げてきた。当時彼の出身地域から日本に留学するためには年収の何倍にも当たる費用が必要だった。家族や親戚はそのような費用をなんとか工面して彼の将来に望みをかけて留学させたのだ。だから一度帰国してまた改めて日本に来てはどうかという提案は彼にとってほとんど不可能なことだった。私はそれを承知で、というよりも気付かないふりをして彼を説得していたのだ。だが再度日本に来

るのが難しいことなど、彼も理解していただろう。彼もまたそれを承知の上で帰国しようとしている。とするなら、私の言動は自己欺瞞以外のなにものでもない。

観覧車から風景を見下ろす彼の顔——それは日本留学に落胆絶望していった学生たちの顔に重なる。私の周りには自分の希望を実現できずに帰国した学生や、大学に入れず不本意ながら興味分野とは異なる専門学校に進学する留学生が少なからずいた。もちろん、私も様々な努力をした。だが彼らのためだと思ってしていたことは、実は学校のためだったのだ。だから、彼／彼女らと進路の話をしているときも、初めから結論は決まっていたのだ。とするなら私の言葉は彼らにとって学校の言葉、バフチン(1975/1996)のいう「権威的な言葉⁵」でしかないのではないか。観覧車の彼を動かしたのは私の言葉だと思っていた。しかし実際は学校の言葉だった。当時の日本語学校の教室は教師や教科書の「権威的な言葉」によって統制され、非社会化された場として機能していた。さらに教室の外でも学生たちは自分の声が届く場を持つことができない。だから自分の身を守るためには学校側の「権威的な言葉」に従わざるを得ない。日本語学校の進路指導や生活指導はそのような抑圧的な装置として彼／彼女らに機能していたのである。私は日本語学校で自分がしていることの意味が分からなくなってきていた。

彼／彼女らの「声」を聴く必要がある、そう思うようになった。日本語学校の教育とは何か。私はどのような教育を実践していくべきなのだろうか⁶。そのような問いに応えるためには、学生たちが日本語学校での経験をどのように意味づけているのか、どのようなことを問題と感じているの

4 ビザの期限が切れた後も日本に滞在すること。日本語学校在籍の不法滞在者が在学学生数の5%を越えると、入国管理局から「非適正校」の判定結果が通知される。この判定結果により留学生の在留期間が決まる。非適正校になることは日本語学校の経営悪化に直結しているのである。

5 「権威的な言葉(宗教、政治、道徳上の言葉、父親や大人や教師の言葉)が我々に要求するのは、承認と受容である」「それに対する態度は無条件の是認か、無条件の拒否のどちらかでなければならない」(バフチン、1975/1996、pp. 161-162)

6 そのような問題意識の中、私は日本語学校の大学院進学クラスという新設クラスのコースデザインを行った。そこで研究のテーマを構想する中で自分の生き方を発見する、「研究計画デザイン」という実践を行うようになった(佐藤、2008)。

か⁷、彼／彼女らの「声」を聴くことによって理解する必要があると考えた。自らの教育現場でもある日本語学校の在校生や修了生にインタビューをするようになったのは、このような状況の中でのことだった。

2. 2. 留学生へのインタビューを始める

上記の経験を契機に私は日本語学校の在校生や、日本語学校を修了し大学等に進学した留学生にインタビューをするようになった⁸。当初の目的は、彼／彼女らの「声」を聴き、問題経験を明らかにすることで、日本語学校の日本語教育は何ができるかを考えることだった。だが、インタビューを重ねていくうちに、留学生がほんとうに語りたことは別のことだということが分かってきた。外から見たら何の変哲もない生活にも学生たちは意味を見出していること、日本語学校に対しても、私の考えていた以上の意味を見出していることが実感できるようになった。

彼／彼女らの語りは聴き手の私にどのような理解をもたらしたのだろうか。日本語学校在校生の華さん、修了生（留学生）秀さん、柳さんのインタビューを事例に考えてみたい。

在校生の華さん（中国・女性・2009年11月日本語学校在学中にインタビュー実施）は2008年に日本に留学した。2010年3月に日本語学校を修了し大学院に進学した。彼女は日本語学校を「居場所」として語った。華さんには日本語学校の外に別のコミュニティとの豊かなつながりがあったわけでも日本人の親友がいたわけでもない。「毎日はバイトと授業、バイトと勉強と普通の生、日常生活、三つがあります」というように、日本語学校の留学生の一般的なライフスタイルを送っていた。だが、華さんが日本に来て一番実感していることは「人々との出会い」だという。「クラスメイトや先生も、バイト先の店員さんも、人々は自分の考え方や生き方がある、と思うようになりました」と語った。華さんは日本に来て明るくなったという。中国ではずっと黙っていて自分の意見を話さないし、性格もよくなかったという。だが

日本で友達の大切さに気付き心からの気持ちを伝えることが重要だと思うようになった。また、華さんにとって日本語学校という場は居場所として機能していた。「うーん、家族みたいです。〇〇〇（学校名）は大きな家です。いろいろな家族がいます。・・・実は普通の留学生は日本に来て、学校しか、訪ねられる場所がないですから、学校が大切です。問題があったら、学校に電話して先生と相談して、これは、自分は安心・・・。安心な場所」と語った。当時、日本語学校では一つのクラスが中国人だけで構成されることも珍しくない。そのことから日本語学校関係の論考は多くが中国人学生の「問題」をテーマにしていた（伊能、2004；中井、2009；など）。しかし華さんへのインタビューからは中国人学生といっても、価値観、考え方の多様性があり一括りにはできないことが分かった。華さんのように同国、同文化、同地域のメンバー間であっても、関係性を構築し発展させることはできるのであり、その中で学びは起きている。むしろ教師や研究者が「問題」としていたところで華さんの学びはあった。

日本語学校修了生の秀さん（中国・男性・2010年3月大学在学時にインタビュー実施）は2006年に日本語学校を修了して大学、その後大学院へ進学した。日本語学校時代、秀さんの日本語力は高くはなかった。しかし4年後の2010年、私は日本語学校を訪れた秀さんの変貌に驚かされた。非常に楽しそうに生き生きと日本語を話している。何がきっかけで秀さんは変わったのか、どのように学んでいるのか、そのような問いから秀さんへのインタビューは始まった。秀さんは中国の高校では成績が悪く劣等感を持っていたという。2003年20歳で日本に留学した。日本語学校では中国からの留学生も多く、彼らの中で劣等感を解消することはできなかった。しかし自分の意思で選んだ中堅の大学に合格し、奨学金も受けられるようになった。この成功体験によって初めて自分に自信を持つことができるようになった。成功体験で得た自信は彼の大学生活を支えた。成績もよく奨学金も4年間受け続けることができた。その後大学院に進学、日本で就職することもできた。現在も日本語学校で知り合った同国の女性と結婚し日本で生活している。

秀さんとは対照的な学生もいた。柳さん（韓国・女性・2010年5月大学卒業時にインタビュー実

7 後述するように、留学生の「問題」を聴きとろうとするこのような構えが、逆に留学生の声を聴こえないものにしていった。

8 2006年から2012年までの間に20数名へのインタビューを行っている。

施)は2004年日本語学校に入学した。日本語学校時代優秀な成績で、いわゆる有名な大学に進学した。しかし大学では日本人とも同国人ともネットワークが作れず大学内では孤立しがちだったようだ。日本語学校では自尊感情を満たしてくれた日本語も大学では日本語母語の大学生と比較し劣等感を感じてしまう。唯一の居場所は講師として働いていた韓国語講座の教室だった。そこで4年間、ほとんど休まず働いた。様々な年代の学習者がいたが、柳さんを非常に慕ってくれた。大学3年生のときから就職活動を始めたが、リーマンショック後の影響で就職活動は全て失敗した。就職活動中エントリーシートを50回ほど書いた。そのことがきっかけで自分の人生を見つめ直し、教師が自分の適職ではないかと考えるようになり、韓国で韓国語の教師になりたいと思うようになった。帰国して教職の大学院に入る予定だ(インタビューを実施したのは大学を卒業し、帰国を1か月後に控えた2010年の6月だった)。彼女の語りには「疲れた、早く親元に帰りたい」「でももう少し日本にいたい」「でも韓国で教師として再出発したい」という様々な気持ちがない交ぜになっていた。

秀さんと柳さんのストーリーは日本語学校、大学、就職活動まで、全てが対照的にも思える。しかし共通して言えることは、留学生の学びを、日本語学校という一教育機関に在籍する時間だけで理解するのは難しいということである。私は秀さんや柳さんへのインタビューを通して、日本語学校の日本語教育を考えていくにあたって、留学生生活全体を視野に入れる必要があると考えようになった。一方で私の問題関心は、秀さんや柳さんに見られたような留学生の成長、自己形成、自己実現のあり方に向かうようになっていった。

2. 3. 元留学生の人生へ

観覧車での彼の「声」を契機に、私は留学生の様々な「声」を聴こうとしてきた。そしてそれらの「声」との対話を通して、自らの教育実践の意味を考えてきた。例えば華さんとの対話は、2006年以降、私が実践していた授業「研究計画デザイン」(佐藤, 2008)を日本語学校でも行えるという確信を与えてくれたし、日本語学校の「居場所」としての意味を賦与してくれた。さらに国や母語、日本語力の差ではなく留学生同士の学びの可能性を確信するようになった。また、秀さんや柳さん

との対話からは、日本語学校/大学と、留学生の学びを区切ってしまうことの問題を考えるようになった。機関を超えた学習者の連続的な学びをどのように捉え、支援できるのか、就職や今後の人生を考えていくための、留学生の人生を背景に考えた実践が日本語学校では必要だと考えるようになった。

このように、私の日本語教育に対する視野は、日本語学校での問題意識や教室デザインの問題に加えて留学期間全体の問題、すなわち空間的時間的なものへと広がっていった。

インタビューの対象が元留学生に変わってきたのは、留学生との対話の延長線上にある。2000年代前半の私費留学生の多くは大学進学を目指して日本に留学してきたが、留学前に何らかの挫折経験を味わっているものが多い。いわば自己の再生を目指してきた彼/彼女らが日本語学校を経て、大学や専門学校で学び、その一部は就職することで留学後も日本社会で生きていくことになる。その過程は彼/彼女らにとって自己形成のプロセスであり、人生の重要な一時期だということができる。その経験を元留学生たちは自己の成長として様々な意味づけている。私のテーマは次第に彼/彼女らの人生そのものに移っていった。

次からは事例として元留学生仁子さんの数年にわたるインタビューを取り上げ、仁子さんによって語られたストーリーと私の構えの変化を記述していく。

3. 元留学生のライフストーリーから

3. 1. 留学生仁子さん

仁子さんは中国上海の出身、女性である。日本の大学への進学を希望して、2003年4月に一年年長の従姉と共に来日し日本語学校に入学した。中国の高等学校を卒業した翌年19歳の時だった。日本語学校では進学コースの初級後半クラスに入った。日本語学校時代の仁子さんの印象は、スタッフや教師にいつも笑顔で明るく、真面目な学生だった。2005年、仁子さんは彼女には難しいと周囲から言われていた第一志望の大学に合格し進学した。4年後の2009年大学を卒業、日本国内の旅行会社に就職し、現在も日本で生活している。2013年に帰化して日本国籍を取得した。

私が日本語学校で日本語教師を始めたのは

2002年、仁子さんが入学する1年前である。私は仁子さんの2年間の在学中、2期⁹6か月間仁子さんが所属するクラスの担任¹⁰を務めた。また進学指導として面接練習等も行っている。仁子さんの在学期間は私にとって、どのように教育実践を行っていくか模索していた時期でもあった。

私は今まで仁子さんにライフストーリー・インタビューを3回行った。最初は2010年5月、日本国内の旅行会社に就職して2年目の時だった。2回目は2012年10月、働き始めて既に4年が経っていた。3回目は2013年7月で、これまでの私の解釈を話しフィードバックをもらうために行った。それぞれ1時間半から2時間程度行った。その間、私も日本語学校から大学の日本語教育へ実践の場を変えている¹¹。

仁子さんは2000年代前半に私が日本語教師として関わった留学生の中では、日本での就職に成功し、留学後も連絡をくれる数少ない元留学生の一人であった。日本語学校修了後も大学に在学中は連絡がとれる留学生が多い。だが多くの学生は大学（または大学院）を卒業後帰国する、または就職できずに帰国を余儀なくされる。帰国しても連絡が取れる学生はほんの僅かである。2000年代前半、挫折感を持って日本語学校に入学してきた留学生の、経験や自己形成をつぶさに見ていくためには、私にとっても仁子さんの語りは不可欠であった。一方仁子さんの方でも「自分を確かめることができる」と言って、インタビューを自己表出の機会として肯定的に受け止めていることも確かであった。日本社会での経験を話すことは仁子さんにとっても自己確認につながる感覚を持っていたようだ。

9 多くの日本語学校では、4月期、7月期、10月期、1月期開講の年4期制をとっている。

10 私が勤めていた日本語学校ではクラス担任制をとっていた。クラス担任は週2～3回授業の他に学生のカウンセリング業務など生活や進学アドバイザーのような役割を担っていた。

11 数年に渡って仁子さんへのインタビューが可能だった理由として、まず適度なラポールが形成されていたことが挙げられる。私は日本語学校時代、授業以外にも、演劇サークルの顧問、進路指導等仁子さんとの接点があった。また、仁子さんの卒業から数年後、仁子さんの年下の従妹が同じ日本語学校に入ってきたということもインタビューを依頼することができた要因であった。

仁子さんが帰化の意思を私に語ったのは2012年のインタビューの時だった。この時のインタビューを私は「本を書くなら、自分の人生、今なら何章？」と始めている。仁子さんは、1章は中国時代、2章は留学から今まで、今はちょうど2章の終わりだと応え、そのストーリーを1章から語り始めた。現在に至るまでの話を語り終えた後、彼女は「今、帰化申請をしてるんです」と言い、間を置いて「でも、帰化っていうと自分今までの中国国籍を捨てることによって、なんか、大きな、一つ大きな決断になるから」と語った。

中国国籍を捨て日本国籍を獲得すること、それは仁子さんにとっても「大きな、一つの決断」である。彼女の留学動機は、2000年初頭の中国の私費留学に典型的なものであった。留学前は、これほど長く日本にいることになるとは思っていなかったのである。では、帰化選択の決意は仁子さんの中にどのように生じてきたものなのだろうか。2010年と2012年のインタビューの語りをもとに、帰化選択に至る仁子さんの自己形成のプロセスを記述し、彼女にとって帰化選択がいかなる意味を持つのかを見てみよう。

3. 2. 大学時代から2011年までのストーリー

仁子さんは19歳で留学、日本語学校在籍2年目に第一志望の大学を受験し合格した。

中国にいたままだったら決して入れなかったと思える第一希望の大学に合格できたことは、仁子さんの自信回復になるとともに、日本留学を肯定的に意味づける大きな要因になった。その後の留学生時代についてのインタビューでは、「勉強ができる外国人留学生として承認される私」の語りが幾つかの事象から語られている。大学時代の経験は他者からの承認を認識する機会となり、自己効力感を育む経験として語られ意味づけられている。留学生時代の仁子さんは大学合格や奨学金、就職などの選択（選択されること）を実現させる過程で、日本で生きる意味を見出していったのである。

2009年旅行会社に就職した。仁子さんが仕事を「やっていける」と感じられるようになるのは、社会人2年目からだった。彼女の語りからは大学から就労2年目の過程で「勉強ができる外国人留学生」としての承認から「仕事ができる社会人」の承認という、「承認される私」の変容が読み取れ

る。2年目、仕事の関係で近隣の日本語学校の留学生や日本語教師に留学生活の話をする経験をする。自分で他者に働きかけること、自分のことを語ることが他者の人生に意味があり、助けになるという自覚、自分の経験の価値を自覚するようになった（「日本社会で有能な自己」の自覚）。3年目の異動で日本語のみで仕事をこなすようになった仁子さんは、次第に日本語で仕事をすることに不自由を感じなくなっていく。自分の経験の価値の自覚と共に、日本語ができるようになったという実感は、その後の彼女の大きな支えになった。

3. 3. 震災経験の語り——日本で生きていくことの意味を改めて考える

2011年3月11日、東日本大震災が起きた。日本国内に在住する外国人に大きな衝撃が走る。多くの外国人が一時帰国または帰国していった。当時、会社近辺に中国語母語話者が多く在住していたことから、仁子さんは臨時の「外国人専用の部署」に配置された。そのときの経験がその後の彼女の帰化選択を方向づけた。

震災直後、多くの外国人が飛行機のチケットを求めて会社に来た。仁子さんは中国語関係者の対応を一手に引き受けることになる。そこでチケットの相談だけではなく様々な生活の相談を在住者や留学生から受けた。その時の自分を仁子さんは「カウンセラーのような」存在だったと語る。今まで日本で築いてきたものを全て捨てて子どもを連れて帰りたいという女性や、日本にきたばかりの留学生、念願だった大学に入学したばかりの大学生等、様々な人がいたという。そのような人々と話し合ったことがきっかけで仁子さん自身も日本で生きる意味を考えるようになった。仁子さんは次のように語る。

仁子：（相談を受けて）改めて自分が何でこっちに来たのか、こっちで仕事続けてもいいかということもすごく、いろいろ考えてきたんですけど、でも結局自分が持ってたのが、高校卒業してからずっとこっちに来ていたので、自分の考えだと、もっと日本の方が、成長の舞台だと思ってるんですけど。もし、すべて諦めてしまうと、向こうに帰っても、また一からの段階で築かなくちゃいけないこともあります。（2012.06）

「外国人専用の部署」での経験を契機に仁子さんは改めて自身の過去と未来について考えるようになる。「なぜ日本に来たのか」「仕事を続けてもいいか」仁子さんは思う。だが仁子さんには、高校卒業以降の大切な時期を日本で過ごしてきた、今の自分は日本での学びや生活の中で形成されてきたという思いがある。仁子さんにとって「日本の方が、成長の舞台」なのだ。しかしそのような思いは積極的なものばかりではない。直後の「すべてを諦めてしまうと」「一からの段階で築かなくちゃいけないことも」ある、つまり日本が成長の場であると感ぜれば感じるほど中国ではやり直しが大変だという実感も強くなるのである。このように日本に居続けたいという思いには、日本を自分の成長の舞台と考える積極的な思いと、国に帰っても一から始めなければならないという「ありえたかもしれない別の居場所の喪失感」という思いが交錯して存在していることが分かる。

仁子：もしそのとき、帰って、日本にいたすべて、諦めて帰るとなると、悔しいになる部分があると思うんです。そうすると、一つの選択によって今までの、人生の歩き方変わってきたなと思う部分もあります。（2012.06）

もし日本の生活を捨てて中国に帰っていたら、と仁子さんは思う。日本で築いてきたものすべてを諦め帰っていたらその後の人生も変わってしまっただろう。一つの選択によって「人生の歩き方」が変わってしまうことを仁子さんは実感した。

このように、震災の経験を通して仁子さんは日本で生きていくことの意味を改めて考えるようになった。その結果仁子さんは日本への帰化を決意するのである。仁子さんにとって震災から帰化という流れは連続した経験として語られる。仁子さんは帰化を考え法務省に前年（震災の年）聞きにいったと語っていた。日本を去ろうとする外国人居住者が多い中で仁子さんが帰化を考えたのも、震災経験が影響を及ぼしていると考えられることができる。

では仁子さんの帰化の決意を促したものは何か。まず彼女は中国のパスポートの不便さを語った。次に中国に帰ってもやり直しは難しく自分の居場所がないことを挙げた。「結局向うで働いた実際の経験もないし、国に帰っても、親以外に自分に

優位な条件というのは現実というは何も」ないと語った。10代後半から日本で学び、生活していた彼女にとって日本での生き方が主体的になればなるほど、逆に中国における「あり得たかもしれない別の居場所の喪失感」が大きくなっていく。そして最後に以下のように語った。

仁子：もうひとつ、本当に深い話だと、もし自分将来結婚して子ども生むと、日本国籍持っているから、私みたいじゃなくて、もっと自由に、自分のやりたいことが選択できるかなと思って。

佐藤：仁子さんが。

仁子：はい、自分のことも、もし中国国籍と、限られていることが多いので、留学しても、簡単にいけないから。そうすると、その、自分だけじゃないけど、次の代にも、自分ができることを、ちゃんとしてあげたいなと思って。はい。それを考えると自分ができることを今のうちにしておいたほうがいいかなと思って。
(2012.06)

仁子さんは帰化を現在だけの問題ではなく、未来の自由と、まだ見ぬ子どものためにも必要だと語った。将来家族を持ち、日本で子どもが生まれることがあったら中国国籍を持っていることで子どもを不自由にさせてしまうのではないかと仁子さんは考える。未来の子どもに「もっと自由に、やりたいことが選択できる」ようにしてやりたいと仁子さんは語った。

3. 4. 居場所確保の営み、自己実現のための生き方の選択

以上、仁子さんの帰化決意のストーリーを記述した。これまでのストーリーから、仁子さんにとって留学の生活は、単に学歴や就職のためだけというものではなく、自己回復としての意味があったということが分かる。仁子さんにとって、日本語学校から就職までの「選択」は「選択される」ことでもあったが、それらの選抜を克服していくことによって、中国時代に受けた挫折からの自己回復はなされていったと考えられる。それに対して帰化の決意は、未来につなげる自己投企のための「選択」ということができるだろう。そのためには自己回復だけではなく「日本社会で有能

な自己」という、新たな自己の構成も必要だったと考えられる。しかし、一方で仁子さんの語りからは「ありえたかもしれない別の居場所の喪失感」と名づけられるような語りも見られた。今から帰ってもしょうがない、帰国しても頼れるものがない、といった語りである。

鈴木、張（2011）では女子留学生を「学業を遂行する主体であると同時に」、「各々の発達課題に取り組んでいる主体的存在として見る必要性」があるとし、「ライフステージ上の発達課題に向き合う上で『留学生』であること」の意味を考察し、「浮き草的自己把握」という概念を提出している（鈴木、張、2011）。そこで明らかになったことは、大学院女子留学生には母国での「仮想の自己」と「実際に日本にいる自己」の間に「断絶の感覚」が生じやすく（例えば母国で結婚している自分と日本で研究してもなかなか評価されない自分の断絶の感覚）、そのことが「言語主体にとって自己があたかも浮き草のように根のない存在で認識される」という「浮き草的自己把握」にはまり込みやすくなるということである。

このような「仮想の自己」と「現実の自己」の「断絶の感覚」は大学院女子留学生だけのものではない。たとえば仁子さんの次のような語りがある。

（年だという仁子さんに、私が「まだ若い」と発言したことに対し）

仁子：いえいえ、向こうの方は大学を卒業して、24、25で普通に結婚している年なんですよ。で、こっちから向こうに帰ると、普通の会社に入っても、平社員からやり直すので、そうすると大卒の人と比べると、4、5歳の差はありますし、また、差別ではないんですけど、何か、日本から帰ってきたっていう、向こうから見ると、何か私の態度でかいとか、そういう思われたくない部分もありますから。
(2012.06)

ここでの仁子さんの語りには、私の無遠慮な「まだ若い」という語りへの反発と、中国の女性の、大学卒業から結婚までのモデル・ストーリーを思い描く仁子さんの「今さら帰っても」という諦めの気持ちが表れていた。つまり仁子さんにも、中国という「あり得たかもしれない別の居場所」

にいる「仮想の自己」と「実際に日本にいる自己」の断絶があるのである。だが仁子さんの場合は「仮想の自己」と「実際に日本にいる自己」の天秤が、鈴木、張（2012）とは逆に傾いている。

仁子：しかも自分の今まで築いた仕事もだし、ま、中心ていうか日本に持っているから、それをいきなり全部放棄するっていうことは私自身としては、自分が許されない部分があるから、絶対日本に戻ってくる、という決意をしてたんです。（2012.06）

震災の経験を契機に仁子さんは自分の「中心」を「日本に持っている」と感じるようになった。「それをいきなり全部放棄」は考えられない。このように留学後の経験を通し仁子さんは「実際に日本にいる自己」に自分らしさを感じている。対して、中国という「あり得たかもしれない別の居場所」にいる「仮想の自己」は、実現不可能なものとして把握されている。「仮想の自己」の実現不可能性という意味では鈴木、張（2011）と同様である。

以上から、仁子さんの帰化決意のもう一つの意味が導き出せる。「ありえたかもしれない別の居場所」にいる「仮想の自己」が、実現不可能なものとして把握されればされるほど、仁子さんは「帰化を選択させられる」ことにもなったのではないだろうか。今や仁子さんにとって、よりよく生きる場所は「日本社会」しかない。仮に、仁子さんが日本にいらなくなるようなことがあったとしたら、彼女はどこへも行くことができなくなる。だからこそ日本と確実につながっておきたいと考えた。その結論が帰化の選択なのではないか。ここから考えられるのは、仁子さんの帰化選択の根底には、自分の居場所を失うかもしれないという存在の不安があったということである。

ここまでの分析から仁子さんのストーリーを次のようにまとめることができる。仁子さんにとって留学は大学進学のための留学であり、留学修了後は帰国するつものものだ。しかし大学や職場で他者の承認を受ける過程で、留学を人生の貴重な時間と考えるようになった。2011年震災では留学生や地域の外国人の相談役になることで、改めて日本は自己の成長の場であることを思い、日本への帰化を考えるようになった。そして

自分自身の将来の生き方や、未来の家族・子どもの幸福を構想することによって、日本で生きる意味を意味づけることができるようになった。一方で、その決意の根底には、居場所を失うかもしれないという存在の不安もあった。仁子さんにとって帰化の選択は自分自身の活動をよりよくしていくための「居場所構築、自己実現のための生き方の選択」だということができる。

3. 5. よりよく生きる権利の獲得としての帰化へ
帰化選択のプロセスは、2012年の仁子さんへのインタビューにおける帰化の語りを契機にそれまでのインタビューを帰化選択のストーリーとして再構成したことによって見えてきたものだ。ここでは2013年のインタビューから、今までの補足を試みる。

2013年春、私は、仁子さんから帰化したという知らせを受けた。そこで同年7月、インタビューのフィードバックと帰化後の感想を聴くために改めてインタビューをお願いした。そのときのインタビューで改めて実感したことは、居場所を失うかもしれないという仁子さんの不安の感覚は、私が想像していた以上に強いものだったということだ。むしろ「居場所を奪われてしまうかもしれないという不安」と言ったほうがいいのかもわからない。仁子さんは帰化の許可が出たとき、「ここにいられるっていう安心」（2013.07）を強く実感し安堵したという。入社頃から「どうやって自分が成長していくか、教えてくれる人は、みんな日本人」であり「負けちゃいけないという気持ちになると、ちょっと重くなるときもあって、そうすると仕事ビザだから、会社のビザでちゃんとしないと、日本にいられないっていう、思い」（2013.07）が強く、精神的に苦しいときもあったという。

仁子：私も最初は、大学卒業して、ここから結婚するか、何もわかんないんですけど、でもやっぱり、前のインタビューでも言ったように、自分の青春時代っていうか20歳から大学まで、この6年間か8年間、重要な部分、自分にとっては、そうすると、ここにいられないっていうか、ここにしようという気持ちに、なんとなく心の中になってきたということになるんで、いきなり震災、中国に帰る、私ちょっと考えられないような、もう考え方、

思いがついているので永住をとるか帰化申請とるか、どっちの道をしなないといけないという、仕事するときも最初から考えてたんですけど。(2013.07)

日本での生活が長くなるにしたがい、仁子さんの不安感が次第に強くなっていったことが分かる。「ここにいられない」かもしれないという不安と「ここにしよう」という意思が「なんとなく心の中に」なってきた。だからこそ日本にいられなくなってしまう怖さを、震災で感じた。震災は一つの契機だったのだ。日本から出なければならぬのではないかという不安、しかし中国には帰れないという思い。このような、仁子さんの根底にあった居場所を喪失するかもしれないという根源的な不安=アイデンティティの不安は留学、留学後の生活を通して次第に形成されてきたものだということができるのである。

帰化を「居場所構築、自己実現のための生き方の選択」として考えている仁子さんにとって、国籍を変えることにそれほど抵抗はない。

佐藤：そうなんだ、じゃそんなに（帰化することに）抵抗っていうのがなく。

仁子：私はないんで。ただ国籍変わって他のこと何も変わらないと思うんで。だって普通にあって、名前聞いてあなた外国人の人で、あなた国籍どこって、たぶん聞かれもないんで、普通に外国人扱いされると思うんで、特に私今日本人って言わなくてもいいくらいなんで、別に（笑）。なので普通にそのまま生活していくっていうこと、考えてるしかないんで。(2013.07)

仁子さんにとって帰化の意味は日本でよりよく生きる権利の獲得であった。これからも周囲からは「普通の外国人扱い」されていくだろう。帰化をしたからといって日本人／中国人という差異の解消ができるわけではない。帰化は仁子さんにとって自己実現のため、自由に生きるためのものである。仁子さんは、このときのインタビューで初めて、未来の具体的な計画も話してくれた。帰化したことで、今のキャリアを生かした転職も考えるようになったこと、次の人生設計を考え、日本を拠点に別の国に留学する可能性も語った。

4. 私の構えはどのように変容したか

4. 1. 2010年の私の構え

仁子さんの帰化選択のプロセスは、2012年のインタビューにおける帰化の語りを手がかりに、2010年と2012年の語りを帰化選択のストーリーとして構成し直すことによって見えてきたものだ。さらに、そのストーリーを仁子さんに示すことによって、2013年には「居場所を喪失するかもしれないという根源的な不安」の語りも語られた。2012年のインタビューは2010年のインタビューの「続き」として語られているわけではなかった。職場での経験、震災の経験は仁子さんの生き方や考え方に変化をもたらし、新たな語りにつながっていった。

では聴き手としての私は、仁子さんの語りにもどのように関係していたのであろうか。仁子さんの語りの変化を私の構えの変化という点から捉え直してみたい。その上で、仁子さんの新しいストーリーがどのように構築されたのかを明らかにしていく。

2010年とそれ以降のインタビューのトランスクリプトを比べてすぐに気づくことは仁子さんの発話量の違いである。2010年のインタビューではどちらかと言えば一問一答に近い形でインタビューが進められているのに対し、2012年のインタビューでは私の一つの問いに対し仁子さんの応えは非常に長く、語りの内容も豊かで生き生きとしている。2012年のインタビューが終了した段階で私はこれを仁子さんの日本語力の変化と感じていた。もちろん「すごく日本語が成長した」(2012.06)と本人が実感しているように日本語力の変化はあった。日本での体験も当然増えている。だが、分析から見えてきたのは、仁子さんの語りの変化は仁子さんのアイデンティティ・ワークの変化であり、そのアイデンティティ・ワークを保障する私の聴き方の変化でもあったということだ。どんなに多くの体験を持っていても、語り手が語るべき内容と見なさなければそれは語られることはない。その語るべき内容を大きく方向づけているのは、聴き手の構えによってもたらされる聴き方でもある。つまり仁子さんの語られた物語の変化は彼女自身の経験の変化であると同時に私の変化でもあった。

2010年のインタビューを私は以下のように始めている。

佐藤：今の仁子さんになるまでね、日本に来てから、今の仁子さん、日本語学校卒業して大学卒業して、今の会社に勤めて、いろいろありますよね、それまでの経験を自由に話してくれますか。

仁子：どこからでもいいですか、日本語学校からでもいいですか。(2010.05)

このような私の問いを受けて仁子さんが語り出したのは、留学生時代から現在までの大学や職場での日本語にまつわる経験であった。日本語学校時代と大学時代の日本語教育の違い、大学のオープンキャンパスに参加して教授や日本人学生から日本語が褒められた経験、就職活動の経験、旅行会社1年目の様子が語られた。その中で私に対して一貫して語られ続けたのは仁子さんの「外国人(留学生)として日本語の問題経験を克服しながら成長していく自己」であった。

仁子：会社に入っても、日本人と比べて、褒められるんですけど、日本語上手ですね、でも自分にしては、日本に長いからそこまでできないと、やっぱり悔しいところもある、なんか、外人っぽいと言われると悔しいので、日本人なみにしゃべりたい、仕事したいということもありますし。(2010.05)

2010年のインタビューで仁子さんは「日本語を褒められる」という表現を何度も使っている。日本語を褒められ続けるということは、すなわち外国人として差異化され続けるということでもある。その結果「日本人なみにしゃべりたい」「仕事したい」という思いも仁子さんの中で構築される。2010年のインタビューではこのような「外国人(留学生)として日本語の問題経験を克服しながら成長していく」自己の語りも仁子さんの中で語られている。このような仁子さんの語りの内容を方向づけていたのは、仁子さんの経験だけではなく、聴き手としての私の構えから出る問いでもあった。つまり「外国人(留学生)として日本語の問題経験を克服しながら成長していく自己」は2010年のインタビューの中で仁子さんと私によって共同で構築されているのだ。

佐藤：じゃ、今いろいろ話してくれたんですけ

ど、日本語のことじゃなくてもいいんですよ。でもやっぱり日本語のことが大きくなるんですよね。仁子さんも最初は留学生として日本に来て、やっぱり日本語というのは一番気になる、ことですかね。

仁子：そうですね。やっぱり日本語喋れないと、そういう、なんか、影響が大きいと思います。やっぱり外国人にしても欧米とかアメリカ人だと、日本人の方、合わせて英語をしゃべってあげるんですけど、でも中国人とか人韓国人の人、日本人の人に、やっぱりこっちの方が日本人に合わせて日本語喋るんじゃないですか。そうすると自分がちゃんと日本語喋れないと、日本人の人と友達になれない、それ以上に付き合えないという意識が、その、頭の中に入ってるんです。それ、日本語ちゃんとできないと友達もできない、何もできないじゃないですか。(2010.06)

このやり取りには日本語に困難を覚える留学生として仁子さんを捉え、その問題経験を語らせようとする当時の私の構えが端的に表れている。「でもやっぱり日本語のことが大きくなるんですよ」「仁子さんも最初は留学生として日本に来て、やっぱり日本語というのは一番気になる、ことですかね」という私の語りも、それに続く仁子さんの外国人留学生としての「日本語喋らない」という語りを呼び起こしていくのである。このとき、私の語りは仁子さんを日本語に困難を覚える「第2言語学習者」「留学生」という異文化的な他者として語らせようとする「抑圧する主体」(石川, 2012, p.7)として機能していたことができる。

佐藤(2010)では2010年の仁子さんに対するインタビューをライフストーリーとしてまとめ、考察した。そこで記述されているのは在学中も就職後も「規範的な日本語にこだわらざるを得ない」(p.194)仁子さんの葛藤のストーリーであった。当時の私は仁子さんによって語られていたとしても、「人生の選択」の語りに耳を傾けることができなかった。日本語の葛藤に注目するあまり、私は仁子さんの人生の語りを看過していたのである。もちろん「日本語の問題経験を克服しながら成長していく」語りも重要な語りであることには変わりはない。問題なのは「日本語の問題経験を克服

しながら成長していく」という語りを語らせようとする私の構えであり、その構えによって仁子さんの多様な声が語られない、または聴かれないことなのである。

では、私の構えはどのように作られたのであろうか。その根底には、2000年代初頭の日本語学校での経験によって構築された「留学生は日本社会において困難な問題を体験している」という留学生像、学習者観があるのではないかと思う。既に述べたように、2000年代前半は、日本語学校の留学生の多くが困難な生活と学びを強いられていた。彼／彼女らは教師や教科書の「権威的な言葉」に統制され教室の外で自分の「声」を出すことができない、そう私には思われた。だから私は彼／彼女らの「声」を聴かなければならないと思った、それが私の出発点だった。だが、「日本語教師」としての私の、聴かなければならないという思いが、時として（それは今でも）彼／彼女らの多様な声を聴こえない構えを構築してしまうことがあるのだ。2010年の私はそのような構えで仁子さんを見ていたように思う。進学、就職と、常に彼／彼女らは「外国人」として差別されているのではないか、日本語の問題や異文化適応に苦労しているのではないかと等、そのような暗黙の前提が私にはあったと思う。「日本社会において困難な問題を体験しながらがんばっている留学生」—このようなモデル・ストーリーが、2010年のインタビューにおける仁子さんの語りを方向づけ、それ以外の語りを阻害していたと考えられるのだ。

4. 2. 構えの変化

前述したように、2010年の私は2000年代初頭の留学生像、学習者観に影響され「留学生は日本社会において困難な問題を体験している」という構えを暗黙の前提として受け入れてしまっていた。このような構えが仁子さんの語りを方向づけていた。2012年のインタビューでは、人生を自己物語として捉え直すこと、自分を本の作者兼主役として捉え直すことで、仁子さんに語り直してもらった。このような構えの変化が仁子さんの過去、現在、未来を語ることにつながり、帰化のストーリーとして具体的に語られていった。

では、私の構えはなぜ変わったのだろうか。まず、その頃実施していた他の語り手たちとの対話からの影響がある。たとえば日本語学校では日本

語がそれほどできなかった秀さんが大学や大学院での学びを通して自信を構築し就職に成功していく語りや、就職活動に挫折はしたが、その過程で自分のやりたいことを発見し、帰国してやり直そうと決意する柳さんの語りを聴いていく過程で、問題経験として私が捉えようとしていた彼／彼女らの語りや、人生という時間の中に置き直すことによって、様々な意味を帯びてくることが分かってきた。長い時間の中で留学や日本での経験を見ていく必要があると思うようになってきたのである。

次に私自身の実践の場が変わったことも大きい。私は、2012年春、実践の場を大学に移した。そのことは留学生教育を日本語学校の教育と直接に結びつける必要がなくなったことを意味した。教育実践に対する自分の位置づけが変化したのである。そのことは私の今まで行っていた元留学生に対するライフストーリー・インタビューの意味も変えた。日本語学校の問題や日本語の問題を取り出すために留学の物語を聴くのではなく、人生における留学経験の意味（その中に日本語学校の経験の意味もある）を理解するために聴くことから始めたいと考えるようになっていた。語りから語り手の外にあるものを理解しようとするのではなく、語り手そのものを理解したい。私の関心は語り手の自己物語のあり方へ移っていった。

このように、2010年とは構えの異なる私の問いかけを受けて、2012年の仁子さんは彼女の新しいアイデンティティ・ワークを始めた。目の前にいる一人の若者の成長、発達の語りを聴きたい、そのような構えの問いかけが、仁子さんの語ろうという意思と結びつき、新たな語りへとつながったのではないかと。もちろん、2012年の「成長、発達する一人の若者」もまた一つの構えである。そういう意味では仁子さんは2010年の語りとは別のアイデンティティを表明したに過ぎない。しかしその語りや仁子さんにとって新しいストーリーであったことも確かなのだ。

4. 3. 語り手に寄り添うことで生まれた「自己を支えることば」

ここまで2010年と2012年の構えの差異を記述した。まず2010年のインタビューでは、2000年代初頭に構築された留学生像の影響で「日本語の問題経験を克服しながら成長していく自己」の語

りを仁子さんに期待する私の構えがあった。そのような構えが仁子さんの語りを語れない、聴かれないものにしていった。だがその後のインタビュー実践で、日本語学校の問題や日本語の問題を引き出すことを目的として留学生の物語を聴くのではなく、留学生の自己物語を理解し、そこから教育への示唆を得るためにライフストーリー・インタビューを行いたいと考えるようになっていった。仁子さんに対する2回のインタビューには、このような私の構えの差異が明確に表れていた。2012年のインタビューでは仁子さんの自己物語が語り直され、帰化のストーリーが語られた。そしてそのストーリーを考察することによって「居場所構築、自己実現のための生き方の選択」という帰化の意味が構築されたのである。

このような対話的な関係を通して、仁子さんは新たな自分のことばを構築していく。以下はインタビューも終盤になり、留学の意味について改めて聴いた際に出てきた語りである。

佐藤：ま、それはともかくとして、仁子さんにとって留学というのがどういう意味があったとか。今は留学じゃないわけですね。今は仕事をして働いているわけですけど、4年前まで留学ですね。留学というのは、日本にきたことでもいいですが、どんな意味があったかというのは。

仁子：自分の人生を変えました。

佐藤：変えました。

仁子：はい。それを、たぶんもし留学しなかったら、ずっとそのまま、何も語ることはできない部分になるんですけど、何か、ずっと一つの村で、他の国とか何にも見たことがない、村のことしか知らないそういう一つの人間になってるんですけど、でも留学を、一つのきっかけになって、自分知らない世界、自分知らない人間、自分知らない言葉が勉強できました。それで、今までと想像とは違った生活をしていますし、これからまた新たに出会う、ということもありますし、はい。

佐藤：成功ですか。

仁子：ま、成功ですね。留学しなかったら、たぶんお母さんになって普通に生活してるのかなと思って。留学したから、たぶん、他の人から見ると、向こうの自分の友達から見ると、

遅くなってる一方なんですけど、私にとっては誰にも与えられない経験がいっぱいありました。その、できない友達、いっぱい持つてるし、人になんか経験がいっぱいあったし、その、自分を勉強させる過程、一步一步積み上げてきたことは、これからでも自分自身でも何かあるときに困ったときに、自分に聴かせる部分になりますし。

佐藤：・・・2章のまとめみたいだったね。

仁子：そうです(笑) (2012.06)

以前ならこのやり取りを私は「聴けた」とは思わなかったかもしれない。なぜならそこには刺激的な問題経験は語られていないし、ある意味「よくある語り」かもしれないからである。だが、このとき私は「聴けた」という感じを強く持つことができた。「2章のまとめみたいだったね」という私の感想の前の「間」はその感慨を意味している。

留学は自分の人生を変えた、留学していなければ語るべきものが何もない人間になっていたと彼女は語った。留学をきっかけに知らない世界、人間、知らない言葉を学ぶことができた。自分にしかできない経験や友達を得ることができた。そしてそれらの経験の物語は自分自身が何か困ったときに「自分に聴かせる部分」になると語った。「自分に聴かせる部分」という語りを聴いたとき、非常に感銘を受けたことを私はフィールド・ノートにも記載している。その後文字化した際にも私はトランスクリプトへのメモに、「自分に聴かせる部分」を「自己を支えることば」と命名している。では「自分に聴かせる部分」という彼女の語りを「自己を支えることば」として私が重要だと考えたのはなぜか。それは、この「自分に聴かせる部分」が、私と仁子さんの対話の中から生まれてきた語りとして感じられたからだ。幼少期から留学経験、そして今までのストーリーを私に語る中で「聴かせる部分」という言葉が顕在化してきたように思えたのだ。さらに言えば、この「これからでも自分自身でも何かあるときに困ったときに、自分に聴かせる部分になります」という表現は、仁子さんがライフストーリーを語ることの意味を、今ここで見出した瞬間として私には感じられたのである。「自己を支えることば」を持つことによって、将来何かあったときに自分の経験を、そのときの自分に励ましをこめて語ることができ

る。語りの中で構築された「自己を支えることば」が、未来の自分を励まし支えるリソースになると、仁子さんは「いま・ここ」すなわち私との対話の場で気づいたのではないか。

このような共構築の実感は、私が調査者、教師として問題経験を聴きとろうとする構えから生まれることはほとんどなかった。語り手の人生の物語そのものに耳を傾けること、すなわち語り手に寄り添うことによって、語り手と聴き手の相互に新しいことばを生み出す可能性があることを、私はこのとき実感することができた。そしてこの実感を通し、仁子さんの語りが今度は私の教育実践の在り方に示唆を与えた。それは日本語教育の教室という場における、留学生ひとり一人の「自己を支えることば」の構築という課題である。

5. 日本語教育を实践する私がライフストーリーを研究することの意味

ここまでの記述を踏まえ、日本語教育を实践する私がライフストーリーを研究することの意味を考えたい。

観覧車での留学生の「声」を契機に、私は日本語学校の留学生へのインタビューをするようになった。インタビューを始めた当初の目的は、彼／彼女らの語りから日本語学校における教育の問題点を明らかにすることだった。だが留学生達の「声」を聴いているうちに、私は彼／彼女らの「声」の多様さを実感するようになった。彼／彼女らのストーリーを考察していくことによって、私の日本語教育のテーマは教室デザインや日本語学校で学ぶこととは何かという問題に加えて、教育機関を越えた留学期間全体の問題へ、すなわち空間的な問題に加えて時間的な問題へと広がっていった。インタビューの対象は元留学生にも広がっていった。そして元留学生仁子さんの事例では、語り手と聴き手の対話的な変容を経験し、共同で新たなことばを構築する実感を得ることができた。このように私は日本語教育の实践者として、自らの構えを変容させながら留学生や元留学生のライフストーリーを聴くことによって、日本語教育の視野を広げてきたのである。

三代（2013）は、日本語教育におけるライフストーリー研究を概観し、従来は「聴かれてこなかった、日本語や日本語教育に携わる人々の声を

聴くことを第一の目的」としてきたため、「内容、つまり『語られたこと』の考察という方法」（三代、2013、p. 85）を選択してきたと述べる。従来の日本語教育におけるライフストーリー研究では、当事者の「声」を「語られたこと」として記述し考察することが中心的課題だったのである。「今まで日本語教育言説の中で聴き取られてこなかった『声』を聴き、日本語教育の当事者たちの『声』から日本語教育を捉えなおそうという試み」（三代、2013、p. 85）としてその意義は大きい。

しかし、日本語教育を实践する私にとって、ライフストーリーを聴くことの意味はその先にこそある。本稿の初めで私は日本語教育のライフストーリー研究の特徴として、聴き手と語り手が教育実践の当事者であることを述べた。しかし日本語教師である聴き手の私が、学習者である語り手の「声」を聴くというとき、どちらも当事者であると同時にその立場は異なる。その「声」を聴いて教育実践を行うのは日本語教師の私だということだ。だからこそ、「声」を聴くことによって、教育を实践する私にはその「声」に対する責任が生じるのである。聴き手である日本語教師は語り手である学習者に「声」を託される。それはいわば応答責任と呼ぶことができるものだ。

語り手の語りを聴く私は、語りを聴きそれを表現する媒介者でもあり教育実践を行う行為者でもある。日本語教育の实践者として私は「徹底した現場の实践の『声』」（三代、2013、p. 86）を聴く。その「声」を聴くとき、その都度私という实践者の中に応答責任が構築される。その責任の意味を考え、よりよい教育実践をめざして実践していくこと、このような行為性の中にこそ日本語教育を实践する私がライフストーリー研究をする意味と理由があると私は考える。

最後に、仁子さんのライフストーリーを読み解いた現在、仁子さんの声に私がどのように応答していこうとしているのかを記述する。仁子さんのライフストーリーから、帰化は「居場所構築」であり「自己実現のための生き方の選択」という意味づけがなされた。そして「自己実現のための生き方の選択」の根底には「居場所を喪失するかもしれない根源的な不安」があり、それは留学、留学後の日本での生活を通して次第に形成されてきたことが明らかになった。さらに、自分自身の経験の語りである「自己を支えることば」の構築は、

未来の自己を励まし支えるリソースになることも分かった。

仁子さんの語りは単なる一事例ではなく、一つのモデルとして捉えることができると私は考える。なぜなら2000年代の前半に留学した私費留学生の語りとして仁子さんの不安を私は理解し共有できるからである。たとえばパウマン(1998/2010)はグローバル社会の移動者は「旅行者」と「放浪者」に分断されていると述べている。

旅行者は心の欲望に従って滞留するか移動するかを決める。どこか別の場所に経験したことのない新しい機会があることに気づいたなら、彼らはすぐに出発する。他方、放浪者は、たとえそれを強く望んだところで、自分がひとつの場所に長く滞留することはないだろうと思っている。なぜなら、どこへ行っても、彼らは歓迎されないだろうからである。旅行者は、彼らの手の届く(グローバルな)世界が抗しがたいほど魅力的だからこそ移動する。これに対して、放浪者は、彼らの手の届く(ローカルな)世界が我慢できないほど不愉快だからこそ移動する。(pp. 130-131)

2000年代前半の私費留学生もまた「放浪者」だったのではないだろうか。彼／彼女らの多くは自分を取り巻く世界が不愉快だから日本に留学してきた者たちであった。だからこそ、彼らは「旅行者」になることを望んだ。だが多くの留学生が「観覧車の彼」のように挫折し帰国していったことも確かだ。仁子さんはその中で小さな成功を取めた一人だということができる。だが、日本社会という枠の中では彼女はいつまでたっても「放浪者」だった。だからこそ、日本ででの生活が長くなればなるほど「居場所を喪失するかもしれない根源的な不安」は彼女の中で大きくなっていったに違いない。帰化は、彼女にとって「旅行者」になるための一つの選択だった、そう考えることができる。

このような意味として私は仁子さんの「声」を聴き、理解するようになった。では、仁子さんの「声」に私はどのように応答することが可能だろうか。それは言語教育の実践者として、これから日本に来る、または既に日本にいる「放浪者」と

しての留学生に対し、どのような教育実践をすべきか、という問いへの応答でもある。教育の場で、彼ら／彼女らの不安に向き合いながら、私という教師の構えに自覚的になりつつ、彼ら／彼女らの多様な「声」を聴いていくことしかないと思う。その上で彼／彼女らの「自己を支えることば」を共に作り上げていきたい。そのような教育の営みは、私と彼／彼女らの新たなアイデンティティ、自己形成の学びである。

今後さらに加速度を増す移動時代の言語教育には、「自己を支えることば」を構築し、表現するための教育実践の試みが日本語学校や大学、職場の様々な場で必要とされるだろう。共に同じ時代を生きるものとして、彼／彼女らの声を喚起し、励まし、励まされることによって「自己を支えることば」を構築する、私はそのためのことばの教育実践を行っていきたい。以上が仁子さんとの対話から日本語教師としての私が導き出した一つの応答である。

文献

- 石川良子(2012). ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義——インタビューの対話性に着目して『年報社会学論集』25, 1-12.
- 伊能裕晃(2004). 日本語学校における就学生支援——必要となる認識、活動、組織についての提言『留学生教育』9, 169-180.
- 小林多寿子(2005). ライフストーリーを書く／もちいる. 桜井厚, 小林多寿子(編)『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』(pp. 209-253) せりか書房.
- 桜井厚(2002). 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚(2005). ライフストーリー・インタビューをはじめ. 桜井厚, 小林多寿子(編)『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』(pp. 11-70) せりか書房.
- 桜井厚(2012). 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 鈴木寿子, 張愈瑜珊(2011). 長期留学中の大学院女子留学生の語り——断絶の感覚をうみだすもの『ジェンダー研究』14, 53-69.
- 佐藤正則(2008). 研究計画を協働で書く試み. 細川英雄, ことばと文化の教育を考える会(編)『ことばの教育を实践する・探究する——活動

- 型日本語教育の広がり』(pp. 80-97) 凡人社.
佐藤正則(2010). ライフストーリーからみる日本語学校卒業後の学びと成長『2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 189-194.
- 中井好男(2009). 中国人就学生の学習動機の変化のプロセスとそれに関わる要因『阪大日本語研究』21, 151-181
- パウマン, Z. (2010). 澤田眞治, 中井愛子, (訳)『グローバリゼーション—人間への影響』法政大学出版局.
- バフチン, M. M. (1996). 伊東一郎(訳)『小説の言葉』平凡社ライブラリー(原典1975).
- 三代純平(2013). 日本語教育におけるライフストーリー研究『2013年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 83-87.
- やまだようこ(2000). 人生を物語ることの意味, やまだようこ(編)『人生を物語る』(pp. 1-38) ミネルヴァ書房.